
消説家と夜想曲

天海 沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消説家と夜想曲

【Nコード】

N9123B

【作者名】

天海 沙月

【あらすじ】

悠久の砂漠に打ち捨てられた物語は、呼ぶ。孤独で空虚な胸の内を満たそうと、人を呼ぶ。消説、それは長い間誰にも読まれず、消えていこうとする物語。それを集めるく消説家へと、呼び声を聞く少年はまだ、出会ったばかり。

悠久の砂漠に打ち捨てられた物語は、呼ぶ。
孤独で空虚な胸の内を満たそうと、人を呼ぶ。

*

ああ、くそ、まただ。

突如として耳に届いた『音』に俺は顔をしかめる。
最近、頻繁に『音』が聞こえる。誰かの声のような、楽器の音の
ような。

しかも、俺以外の人には全然聞こえていないみたいなのだ。俺は
他の人より少し耳が良いから、そのせいだと思っていたが、どうも
そういうわけではないらしい。

『音』には、場所や時間は全然関係ない。今みたいに学校帰りだ
ったり、授業中だったり。どこへ行こうと、何をしようと聞こえる
ときは聞こえるし、聞こえないときには聞こえない。

唯一の救いは、『音』が耳をつんざくような大音量ではなく、本
当に微かなものだということくらいか。ただ、いくら小さい『音』
とはいえ、人の耳でそこそとうつとうしいことには変わらない。

その上 今日はどうもそれだけじゃないようだ。

俺は後ろを向く。そこには誰もいない。誰もいないように見える
が 確実に何かいる。俺は足を止める。そいつも止まる。俺は三
歩前に進む。そいつも三歩前に。

「……」

何だこいつ？ あれか？ ストーカーってやつか？

俺はもう一度後ろを振り返った。さっきと同じように、姿は見え
なかった。だが、それで充分だ。俺は耳がいい。俺の耳が、相手が
動く微かな擦過音を聞き逃すはずがない。

「そこだ！」

学生鞆をなめんなよ。俺は遠心力を利用して鞆を音のした方へ思いきりぶん投げる。投げた場所には何も無いように見えたが、確かに、ゴツ、と鞆が何かにぶつかる鈍い音がした。

鞆の当たった空間が、ゆらりと揺らめく。そしてそこには、そこには、涙目で恨めしそうに俺を見上げる女の子がいた。あ……あれ？

「う……くっ……」

鞆がぶつかっただけらしい頭をおさえて、呻いている。なんというかその、えーと。

「ご、ごめん」

「貴様あ！ いきなり何をする！ 見ず知らずの者にいきなり鞆を投げつけるほど人間は野蛮なのか！ ええ？」

女の子は小柄な体に似合わないほどの大声で、突然怒鳴りだした。「ホント悪かった。おわびと言っただけなんだけど、これ……」

俺は、ポケットから飴を取り出して女の子に渡す。が。

「いらぬわこんなもの！」

相手は受け取ったかに見えたそれを俺に投げつける。

「うわっ！ 何すんだよ！」

食べ物を粗末にしてはいけませんって小学校で習わなかったのかこいつは！ 俺は慌てて飴をキャッチする。……飴の空袋を。

「ふん。いちごミルクか。美味いじゃないか」

食ってんのかよ。

「む。気配が消えたな。今日は帰るとするか。……おい、小僧。この礼は必ずさせてもらうからな」

ドスのきいた声そう告げると、その女の子は消えた。夕闇の中に、掻き消えるように。

少なくとも飴の礼じゃなさそうだな。

なんだったんだまったく。俺は苦笑しながら鞆を拾うと、家に向かって再び歩き始める。『音』は、いつの間にか消えていた。

*

シ、

耳の奥で『音』が響く。

ソー

なんだこれ……。曲……？

その『音』はいつもと様子が違った。姉貴がピアノをやっていたから、俺にも多少の音感はある。とはいえ、姉貴のピアノは音を間違えたり外しまくったりと、そりゃあ酷いものだったが。

ファース、ファーム。

それよりこれは何の曲だっけ……。聴き覚えがある。かなり有名な曲だった筈だ。音楽の授業をもう少し真面目に受けときゃ良かった……。

曲の後ろから、パコパコと妙な音が聴こえた。これまた聴いたことのある音だ。一体何だ……？

*

俺は一昨日と同じように、アスファルトの道を学校から家に向かってゆつくりと歩く。相変わらず、『音』は耳に付きまとっていた。イ、アオイ。

「！」

『音』がその一瞬、はっきりとした声になって、俺の名前を呼んだ。

「なん……だ今の……」

ざわりと皮膚が総毛立つ。あの曲を除けば、今まであんな風に『音』が明瞭に耳に届いたことはなかった。

「ん？」

何処だここは？

そこは、見たことのない町並みだった。なんでだ？　いつも同じ道を歩いてきたはずだし、道順だって別段複雑というわけじゃない。途中で道を間違えたってのか？　まさか。新人生じゃあるまいし。

とりあえず、どこかで道を訊くか。

そのとき、一軒の店が目にとまった。俺の足は無意識に入り口へ近寄る。まるで、吸い寄せられるかのように。

店内は、うす暗かった。

灯りは今時珍しいランプのみ。つんと、棚から漂う匂いが鼻をくすぐる。本の匂いだ。俺の家族は皆本好きで、家には膨大な量の本がある。新刊があればかなりの古本もあるし、家の中の本を全部読んだ人間は多分家族の中で一人もいないだろう。そんな俺にとって、本の匂いはすっかり慣れ親しんだ匂いだった。まあ、俺は書庫を隠れ家にして遊んでただけだけど……。

「何か用か？」

突然、背後から声が響いた。闇から抜け出てきたような長い黒髪と、小柄な体躯には少し大きすぎるコート。その姿は間違いなく間違いなく　昨日のあの女の子だった。

「あ！」

「！？　なぜこの店にいるのだ！　帰れ！　今すぐ帰れ、即座に帰れ、風と共に去れ」

「あのなあ……」

確かに鞆をぶつけた俺も悪かったけど、ちょっとあんまりな言い草じゃないですか？

「む？　むむむ？」

唐突に相手は眉根を寄せて、じろじろと俺を観察すると、にやりと口の端を三日月形に歪ませた。

「なあんだ、客か」

客？　まあ、店に入った以上、客と言えなくもないが。

俺は、棚に収まっている本を一冊手に取ってみた。革のような装

丁だ。でも、何の革だ？ 俺はぺらりとページをめくってみる。

「不用意に触るなよ。何が起きてても知らないぞ」

「うわたっ！」

直後、本が火を吹いた。ちよ、どういう仕掛け！？

ドッキリもいいところだ、ヘタしたら大ヤケドだぞ。そんな俺を見て、そいつはけらけらと楽しそうに笑い転げる。

「せっかく警告してやったというのに、わざわざ引つかかるとはご苦労なことだ。それは普通の本じゃない。＜消説しょうせつ>だ」

「消説？」

「そうさ。既に消えてしまった物語。それが消説。私はそれを集めて本の形に戻してやるのだ。そうして作った本は、良質の魔術書になる」

魔術書だつて？ いぶかしげな顔をした俺を、そいつはまっすぐに見返す。良くみると少し紫がかったように見える漆黒の瞳。夜陰をそのまま流し込んだようなその目を見ながら、ああ、こいつは日本人じゃないんだな。それどころか、そもそも人間ですらないんだな、と奇妙な納得が俺の中に流れた。

「例えば一昨日。一昨日はこの本を使った」

俺に差し出されたのは『透明男』という題名の本。

「これも＜消説＞だ。ろうそくは消える直前に一際明るく燃えるだろう？ 消説も同じ。物語は消える直前に巨大な力を持つ。だから消説を封じた本は魔術書になるというからくりだ。この本の主人公は透明人間だから、この本を使えば自身を透明化することができる」
「なんだか、わかったようなわからないような。あまりに現実味のない話だが、嘘だとも思えない。」

何故か。

相手の口から一つ一つの言葉が紡がれていく度に、俺の中に不可思議な確信が芽生えてくる。

「そして……この＜本屋＞にも簡単な術が施してある。消説に呼ばれた者を引き寄せるという術がな」

「呼ぶ……？」

アオイ、と俺の名を呼んだ『声』を思い出した。あれは消説つてやつと何か関係があるのか……？

「そう。消説は呼ぶのだ。印象深い者の名を、消えてしまふ前に」

「……！」

「そうだな、お前がもし長い間誰にも見向きもされなかつたらどう思う？」

長い間、誰にも見向きもされずに……。

「そりゃあ、寂しいだろうな」

俺の答えに、そいつはこくりと頷いた。

「その通り。それと同じく、消説は孤独なのだ。孤独に堪えきれなくなつた物語はやがて消説となつて消えていく。その時に、人の名を呼ぶのだ。消える前に一緒に連れて行こうとな」

「連れて行くつて……何処に？」

相手はにやりと笑つたまま、答えなかった。ただ、その沈黙が全てを語っていた。

「この店に引き寄せられたお前は呼ばれているのだ。消説にな！」

あはははは、と笑うそいつの前で俺は凍りつく。おいおい、冗談キツイぞ。

「だから一昨日も気配を追っていたというのに……」

ぎろり、とそいつは俺を睨みつける。

「一昨日の礼がまだだつたな……」

「あ、飴もう一個やる」

「駄目だ」

「飴三十個」

「……」

あ、ちよつと考えてる。

「ふ、ふん、人間ごときが私を買収できると思つなよ！」

うそこけ、バリバリつられてたじゃねえかよ。

その時。

唐突に背後から何かが爆発するような音がし、棚の本が一斉に床に落ちた。

アオイ。

「！」

あの『声』だ。

「わざわざ私の店に現れるとは、随分余裕だと見える！」

ひゅ、と俺の頬をかすめるように、空気を切り裂く音がしたかと思うと、後ろの壁に万年筆が刺さった。

長い黒髪が、人外の速さで横を通りすぎる。

「な」

「邪魔だ。下がれ」

少女の手元が一瞬光ったかと思うと、何か杖のようなものが現れた。

イ、アオイ……。私と一緒に来て。アオイ……。

『声』が俺に呼び掛ける。

ジッ、と俺の目の前の空気が歪み、見知らぬ少女と目があつた。

少女には、色が無かった。白い服と白い肌。其の姿は不規則なノイズのような粒子で形成されている。

いや、ノイズじゃない。あれは……。

文字。

「っ……………」

おびただしい量の小さな文字が凝り固まって、少女の形を作り上げていた。

「アオイ」

「ご指名のところ生憎だが、こちらも仕事なのでな」

黒髪が俺と少女の間に躍り出る。

床の本が浮かび上がると、俺の前に立つ黒髪目がけて襲いかかる。
「消説ごときが魔人に勝てると思うな！」

杖は次々に本を弾き返す。そして、一気に距離を詰めると、思いきり杖を振り降ろした。

「！」

紙一重、少女が横に跳んでそれをかわす。

「……アオイ……」

少女は哀しそうに俺を見ると、弾けるようにかき消えた。

再び、店に静寂が戻る。

「今のが、消、説……？」

ぺたん、と思わず俺は膝を付く。

「そうだ。だが、まだ消えたわけじゃない。一度引いただけだ。もう一度……近いうちに来るだろう」

俺の頭の中は混乱しっぱなしだ。魔人？ 仕事？ 一体全体、何が起こったっていうんだ？

「なあ、お前はなんなんだ？ 魔人だとか『仕事』って一体何のことなんだ？」

「いい質問だ。それはおそらく、私の正体を言うことで解決するだろう」

そいつはあの愉快そうな笑みを口に浮かべて、名乗った。

「私の名は宵^{よい}。魔人だ。だが今は事情あつて魔界を追放されていて、戻るための条件として、このく本屋>で消説の封印を仕事としている。999の消説を封じるまで、魔界に帰れんのだ」

宵は、俺に手を差し出した。

「お前、ここで働け」

「は？」

いきなり何？

「床に落ちた本を戻すのが面倒なんだ。やれ。一昨日のことはそれで許してやる」

「床に落ちた本って……これ全部？」

床は既に、大量の本で埋めつくされている。全部？ ハッ。嘘をつけ。……嘘だよな？

「やれ」

「……」

俺は鷹のような眼光で睨みつけられる。わあ、やらなかったら、天国まで強制的にピクニックに行かされそう。

仕方なく、俺は床の本を拾い始めた。

「ああ、もう一つ宿題を出そう。 消説の〈題名〉を見つけれ」
「題名？」

「消説を封じるには、題名が必要不可欠なのだ。とりあえず探せ」
「手掛りは？」

「知るか」

どうしよう、こいつ殴りたい。でも殴ったら俺の方が吹っ飛ぶな。何せ魔人だし。

はあ、と俺はため息をついた。

画して、俺はこの〈本屋〉で働かされるはめになった。……プラス、面倒な宿題一つ。

*

「姉貴、この曲何て題名だ？」

俺は覚えている限りの旋律をピアノで弾いてみる。

「シヨパンのノクターンね。昔良く弾いてあげたじゃない」
「ちよつと弾いてみてくれ」

姉貴は露骨に嫌そうな顔をした。

「皿洗い代わってやる」

「よし、のった」

皿洗いは嫌だが、情報のためには仕方がない。

姉貴はノクターンを弾き始めた。

シ、

ソー

あの『音』と同じ旋律。

「うわつと、間違えた」

姉貴は相変わらずピアノが下手だ。……ん？ 間違えた？

俺の聴いた『音』と姉貴のピアノはまったく同じだ。姉貴が間違えたと言ったところまで。

パコパコと、妙な音が聴こえる。

「あ」

古くなったピアノの鍵盤が立てる音。

待てよ。じゃああれは……。

「姉貴のピアノ？」

何で姉貴のピアノが。

ということは。

あの『音』は多分消説の記憶なんだろう。だとしたら 書庫にある本の可能性が高い。

俺はピアノの隣の書庫へ駆け出す。

「ちよつと、何処行くのよ？」

「用事！」

うちのピアノ部屋は防音室だ。書庫からあれだけ鮮明にピアノが聴こえるとしたら、壁一枚で隣接している本棚に違いない。

あ、でも。

早速、本棚を見た俺は重大な欠点に気づいた。本の手掛りが無いのに、わかるはずがない。

*

はあ。

俺は何度目になるかわからないため息をつく。未だに消説の手掛りが掴めないままだ。宵の店の掃除も終わってないし。

俺はく本屋>の床に無造作に散らばった本を拾い上げて、本棚に並べる。

「まだ終わらないのか？ まったく鈍いやつだ」

「うるさいな。本が多すぎるんだよ。俺はちゃんとやって……」
本棚に戻そうとした本が床に落ちる。

「！」

なんだこれ。突然、微かだった『音』や『声』がどんどん酷くな
ってくる。

凄まじい音の濁流。頭が、割れそうだ。
。 刹那。

ぶつん。

音が、消えた。

「葵！」

杖を構えた宵が俺をかばうように立つ。

目の前には 消説の少女。

「アオイ、一緒に来テ」

不気味な微笑みに、ぞくりと肌が粟立つ。

「こいつはもう、お前を取り込んで消えるぞ……！」

宵は、自分のぶかぶかのコートを手渡した。

「これは、店の本の装丁に使っている皮と同じ素材で出来ている。

消説の力を跳ね返すことが出来るのだ。これを着て、早く行け。題
名を見つけるんだ……！」

「そんなこと言ったって、題名の手掛りがない！」

あ。そこで俺は一つの可能性に思い当たる。あそこはまだ、探し
てない。 でも。

「お前を置いていけるかよ！」

「ガタガタうるさい奴だな、行けと言ったらとっと行け！ 店長
命令だ！」

「うわ！？」

宵は俺の背中を思いきり蹴り飛ばした。

だって、このコートは消説の力を跳ね返すんだろ？ これが無か

「…！
「案ずるな。力を跳ね返すそのコートはそのまま、私の力の枷にもなる。これで本気が出せるというものだ」
ざわり。宵の周りの空気が揺れ、その密度を次々と変えていく。
「さあ、狩りの時間だ　！」

＊

俺は、宵のコートに袖を通すと、家の書庫へひたすらに走った。宵には元々大きめだったコートは、俺が着ると丁度いい丈になる。ピアノ部屋と隣接している本棚。目指すのはその　後ろ。本棚を動かして、裏側を探してみる。とはいえ、本棚はかなり重い。こりゃあ、力仕事だ。

一個、二個、三個。本棚を動かしていくが、後ろには何も落ちていない。ハズレかもしれない。一瞬、そんな考えが頭をよぎった。そして、最後の本棚。

「いよ……っ！」

力を込めて本棚を前に押す。

埃が舞い、裏側があらわになった。そこには。

「あつた……」

埃にまみれた、ぼろぼろに朽ちかけた一冊の本。間違いない、これが消説の元だ。

ずっと、こんなところに落ちていたのか。

本棚の裏側。何かの手違いでそこに落ちてしまっただけ以来、誰にも気づいてもらえることなく、読んでもらうこともなく。ずっと、ずっと。

この本は、親父が古本市で買ってきて、買ったただけで読んでいない類たぐいのもののだろう。一体、いつからこの本は読まれていないんだ？きつとそれは、消説となって消えてしまっただけになるほどの、俺

の人生の何倍もの、途方もなく長い年月なのだろう。

「ごめんな……気づいてやれなくて」

俺は崩れそうなその本の表紙を撫でると、題名を読み取った。

*

「宵！」

「遅い！」

あ、すみません。戻ってきて早々に怒鳴られてしまった。

「私は独りだったの。ずっとずっと、独り……」

「そうか」

宵は、消説の少女の言葉に、そっけなくそう答えた。

「長い間独りでいると、自分がここにいるのかどうかすらわからなくなる。もしかしたら、自分なんてもういないんじゃないかって、そう思う。あなただって独りになったら、きっとそう思うわ」

「ふん、くだらんな」

その一言で、宵は少女の言い分を一蹴した。

「自分がここにいるのかどうかすらわからなくなるだ？　じゃあ、そうやって迷ってる自分はどこにいるんだ？　自分がいるかいなかなんてことは、自分が決めることだ！」

「……！」

「更に長い間の孤独を埋めようとして、他人を巻き込むだと？　愚の骨頂だな。寂しいから人を呼ぶ。それは別に間違ってはいない。

だが、寂しいなら寂しいと！　側にいて欲しいなら側にいて欲しいと！　相手にはつきり言わずに伝わるはずがないだろう！」

「う、うあああああああ！」

少女の姿を形成している文字が揺らぐ。それは、少女そのものの気持ちの揺らぎをそのまま表しているようで。

「葵、題名を言え」

白紙の本のページを開いた宵の言葉に、俺は頷いた。

そして。

少女の〈名前〉を口にする。

「『夜想曲』」

「う……っあ」

足元からぼろぼろと、少女を形作っていた文字が崩れていく。

彼女の名前は、〈夜想曲〉。ノクターンの別称だ。だから、姉貴のピアノの中でも、あの曲を特に印象深く覚えていたんだろう。

「なあ、一つ訊いていいか？ どうして俺の名前を呼んだんだ？」

『夜想曲』を買ったのは俺じゃないし、俺は本好き家族の中で一人、あまり本を読まない人間だ。それなのに、なんで俺を呼んだんだ？

「アオイは、よく書庫に遊びに来てくれたから……。隠れ家にして遊んでただけで、本はあんまり読んでなかったけど、昔はよく来てくれた。あなたの姿を見るだけで、寂しい気持ちがちょっと、紛れたの……。だから、私にとって、アオイが一番、印象、深かった……、た……」

そして、最後の文字が崩れた。文字の一つ一つは、宵の手にした白紙の本のページにどんどん吸い込まれていく。やがて、白いペーシが文字によって埋め尽くされ、一冊の本になった。

「読むか？」

「……ああ」

俺は、宵から新しい『夜想曲』を受け取る。

消えるというのは、死ぬことと同義だ。誰の記憶にも残らなくなることで、その人間はこの世から消える。そこで、本当の死が訪れる。

それは別に、人間に限ったことではない。動物だって、物語だって、等しくそうだ。

「俺は、忘れないから……」

俺がその存在を覚えている事で、相手の命が少しでも延びるのなら。それなら俺は、喜んでその存在を覚えよう。

「題名というのは、消説にとってとても大事なものだ」

宵が話し出す。

「題名は<名前>だ。名前を呼ぶことは、その存在を認めるのと同じ事。だから題名を口にすると、消説は自分はまだ消えていないのだと安心することが出来る。たまにはそいつの名前を呼んでやるといい 『葵』」

「そうだな、『宵』」

まだ冷たい春の風が吹く外に立つのは、俺と消説家と一冊の本。俺は自分の名をゆつくりとかみ締める。俺は今、ここにいる。

*

「くっそ……」

「ほらほらどうした？ まだ終わってないのか。まったく人間とはどこまでも鈍い種族だな」

「なんで本の整理がまだ終わらないんだよ！」

おかしい。毎日やってるのに何で全然減らないんだ？ 前よりちよつと増えてるような気もするし。

「！」

耳に『音』が届いた。

「何か聞こえたか？」

「ああ。ユキって子の名前を呼んでる。あとは、ドラムみたいな音がするな」

あれから俺は、消説の『声』を聞き取る能力が身についてしまった。自分以外の者に呼びかけている声を聞くのは、魔人でも難しいようで、その能力を買われて、俺は宵の消説集めの手伝いをされて

いる。

契機は、店の本が片付くまで。

すぐ片付くだろうと思って軽い気持ちで引き受けたのがまずかった。全っ然終わらない。そりゃもう、なんでってくらいに。

「それじゃあ、行くとするか」

「しょうがねーな」

さあ、孤独な物語の救済へ。

俺と消説家は立ち上がる。宵の刻にはまだ早い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9123b/>

消説家と夜想曲

2010年10月8日13時48分発行